



## 新規連携研究の紹介

雑誌名	筑波大学特別支援教育研究：実践と研究
巻	8
ページ	99-100
発行年	2014-03
その他のタイトル	Information
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00123199">http://hdl.handle.net/2241/00123199</a>

## 「知的障害児・肢体不自由児への効果的な食育推進プログラムの開発」

○附属大塚特別支援学校 栄養教諭 土田 裕美  
附属桐が丘特別支援学校 栄養教諭 青山 妙子

### 1. 研究目的

知的障害児・肢体不自由児への効果的な食育推進プログラム(子ども達が主体的に食を楽しむ、食に対する意識や行動の変化に繋がるような指導方法)の開発及び検証を行う。

### 2. 平成 25 年度の実践

平成 25 年度は「食文化の継承～お茶～」をテーマに、実践を試みた。

まず、定型発達児を対象に、第 7 回東京都食育フェアにおいて、親子での食育体験活動ブースを実施した。茶葉や急須などに触れ、味わうことで、お茶に興味を持ち親しむきっかけとすることを目的とした。61 組の参加があり、アンケート結果等から、道具の名前やお茶のいれ方を知らない子どもたちも、体験する中で楽しさを感じ、またやってみたいという意欲につながったと考えられた。

これらを踏まえ、附属大塚特別支援学校（知的障害）、附属桐が丘特別支援学校（肢体不自由）での指導を行った。障害特性や学年に応じて「自分なりの方法を見つけること」、「卒業後に習慣として定着すること」等に重点をおき、「教材や道具の選択」、「説明の仕方」などに配慮した。結果、共通して「楽しかった」「今回体験してみて家でお茶を飲んでみたいと思う」等の感想を得た。「日本の食文化であるお茶に親しむ」という目標に対しては、一定の効果があったと思われる。

一方、三者間での相違点として、知的障害児・肢体不自由児では「手や指先を使っての動作に難しさ」が見られ、使いやすい道具の選択や周りのサポートが必要であった。また、肢体不自由児では「家で急須でいれたお茶を飲む」が有意に低く、三者の道具の認知度においても差がみられた。

### 3. 今後の課題

- ・「楽しい」「自分でできて嬉しい」という体験をきっかけに、習慣として定着するためには、どのような食育推進プログラムがよいか。
- ・継続した繰り返しの実践の機会をどのように確保するか。
- ・保護者の興味関心、家庭での食育への理解を高めるにはどうするとよいか。



大塚 親子で体験(大塚祭)



大塚 授業(高等部 3 年生)



桐が丘 授業(小学部 3・4 年生)



桐が丘 授業(高等部 2 年生)

## 「特別支援教育におけるタブレット端末を活用した教材についての研究」

○ 附属桐が丘特別支援学校 白石利夫  
附属視覚特別支援学校 宮崎善郎  
附属大塚特別支援学校 根本文雄

### 1. 研究目的

タブレット端末は持ち運びが容易で、直感的に利用できるため障害を持つ児童生徒の学習にも効果が期待できる。しかしながら、アクセシビリティの面など課題も多い。このような効果や課題の中には、障害種別に寄らないものも多い。本研究ではタブレット端末を利用した教材を他の障害種別の学校と共有、整理を行い、それをもとに、タブレット端末の利用のあり方や配慮すべき事項などをまとめていくことを目的とする。

### 2. 平成 25 年度の実践

それぞれの学校でタブレット端末などのICT機器を利用した実践を進めながら、それぞれの実践を整理していった。

附属桐が丘特別支援学校では、次のような取り組みを行った。

#### (1) ICTセミナーの実施

タブレット端末をはじめとするICT機器を利用して、興味を持っている希望者を対象として放課後に体験会を数回行った。

#### (2) 学習会の実施

実際に学校で利用している生徒を対象に、月 1 回土曜日に学習会を実施した。学習会ではタブレット端末を利用するときに使うアプリケーション、機器を設置する位置、利用するときの姿勢、固定するスタンドや外付けキーボード、スタイラスなどの補助機器の選定などのフィッティングを行った。

#### (3) 筑波大学情報科学類との連携

肢体不自由児向けアプリケーションの開発で筑波大学情報科学類の学生グループ (Coins Project Aid) との連携を行った。大学生に学校へ訪問してもらい、ニーズを伝え、アプリケーションの開発を依頼した。そして開発されたアプリケーションを試用して使ってみた感想を伝えて改良してもらった。この連携にて作成されたアプリは近日中に公開される予定である。



図 1 ICT セミナーの様子



図 2 筑波大学生との連携

### 3. 今後の課題

- ・ 平成 25 年度は各校それぞれの実践が中心だったが、各校の実践をみてみると同じような課題に取り組んでいることも多いと感じた。各校での実践を共有しお互いに連携して実践を深めていきたい。
- ・ 生徒対象のセミナーや学習会を行ったが、有害情報のフィルタリングやセキュリティなどについて保護者からも情報を提供して欲しいとの要望があった。タブレット端末の導入に際しての注意点など内容で保護者向けの講習会の実施も検討していきたい。